

白鳥入芦花 (白鳥芦花に入る)

小学校の頃はとんと本を読まなかったが、中学に入ってから本を読み始めた。中でも『次郎物語』は、中学高校時代何度も読み返し、主人公の本田次郎にいたく共感したものである。表題の「白鳥入芦花」は、中学に入学した次郎が、兄に連れられて、朝倉という教師の家に遊びに出かけたとき見た扁額へんがくの文字である。次郎が意味を問うと、先生はこんな話をしてくれた。「芦あしの花は真っ白に群れて咲く。その中に真っ白な白鳥が入り込むと、姿は見えなくなる。しかし、芦の花はゆらゆら揺れる」

手元に本がないので、記憶だけを頼りに書いているのだが、朝倉先生はそんな説明をしたはずだ。次郎は、先生の言う芦花の光景を心の中に描いてみる。

じつは兄の恭一たちは、先生の家で「白鳥会」というサークルを作り、自由な論壇を楽しんでいたのだ。やがて次郎も白鳥会に入り、学校を追われた先生を

慕って上京するのだが、これは後の話。

愛読者であった私も、「白鳥入芦花」という言葉がいたく気に入り、自分も芦花の中の白鳥のようになりたいと思った。誰にも姿を見せず、それでも芦花を揺らせるような、そんな人間になりたい。

私は現在児童向けの物語を生業にしている。一般文学と違い、子どもは作者の名前には、あまり関心がなない。子ども読者にとっては、作品そのものが面白く感動的であれば満足で、誰が書いたかということは、どうでも良いわけだ。

できれば私も白鳥になって、大勢の子どもたちの心を揺らめかすような作品を書きたいと念じている。しかし、まだまだその境地になれず、真っ黒な鳥がやたら騒がしく芦花をかき回しているような作品ばかり書いているのだ。



1942年、広島県生まれ。1978年に第1作が発表された「ズッコケ三人組」シリーズは全50巻を数え、2005年からは40代になった三人組の姿を描いた「ズッコケ中年三人組」シリーズが始まる。主な作品に、『さぎ師たちの空』（ポプラ社）、『絵で読む広島原爆』（福音館書店）、『海賊モーガン』シリーズ、『お江戸の百太郎』シリーズ、『コロッケ探偵団』シリーズなどがある。